



日本ビジネス実務学会 第29回全国大会

## ビジネス実務教育と初年次教育



第29回全国大会 実行委員長  
**池内 健治**  
(自由が丘産能短期大学)



第29回全国大会は、2010年5月29日(土)・30日(日)の2日間、自由が丘産能短期大学の会場で開催しました。全国から160名を超える参加者にお集まりいただき、研究や交流を深めることができました。学務や教育・研究でご多忙な中、お集まりいただいた方々に感謝いたします。

本大会の統一テーマは「ビジネス実務教育と初年次教育」です。入学者の多様化が進む中で、高等教育機関には質の保証が求められています。大学・短期大学が教育を工夫して、特色のある授業を実施しても、学生の学習態度が転換できず、しっかりした基礎教育を実施できなければ、教育成果をあげることが難しくなっています。そのため、初年次教育に注目が集まっています。昨年度、本学会で実施した初年次教育指導法セミナーも盛況でした。このテーマに対する学会員の関心が高いことが確認できました。ビジネス実務教育に関する研究の蓄積を活用して、初年次教育で成果をあげることがめざして、第29回全国大会のテーマを設定しました。

初年次教育の原点は、学生を能動的学習へと転換させることであると考え、アクティブラーニング研究所の羽根拓也先生に、基調講演「学生を惹きつける技術」をお願いしました。ワークショップ形式の羽根先生の講演は、参加者を惹きつけ、全員をアクティブラーニングの渦に巻き込んでしまうものでした。参加した学会員の方々から、おおいに参考になる講演だったと好評でした。

今回は、各ブロック研究会をお願いをして、初年次教育の事例を発表していただきました。学校の事情に合わせて苦勞をしながら取り組んでおられることがにじみ出た事例発表でした。全学で工夫をして取り組んでいる様子が鮮やかに報告されていて、聴講した方にはおおいに参考になったことでしょう。多様な事例報告は、本学会のビジネス実務教育の蓄積の有効性を再認識できるものでした。

来年、本学会は30周年の節目を迎えます。就業力支援、質の保証、初年次教育、実践的な教育指導法、体験学習の教育指導法など、時代は、本学会のめざしてきた教育・研究と同じベクトルを向いてきています。これまでの蓄積を活かして、高等教育の質の向上に貢献していきたいと願っています。

第1日 5月29日

開始・終了 セッション[会場]

- 09:15-10:10 受付[1号館 1階]
10:00-10:10 ●開会宣言・大会会長挨拶・日程説明等[1号館 5階 会議室]
10:10-10:55 ●2010年度総会[1号館 5階 会議室]

- 11:00-12:20 ●基調講演
「学生を惹きつける技術」[1号館 5階 会議室]
羽根 拓也氏(株式会社アクティブラーニング代表取締役社長)
経済産業省・社会人基礎力育成プロジェクト委員
デジタルハリウッド大学(院)教授・教育手法最高責任者、山口大学客員教授

- 12:00-13:00 昼食[1201・1202]

- 13:00-13:25 ●2009年度 JAUCB受託研究報告
「ビジネス実務分野における汎用能力とその教育方法」
池内健治・大島武・梅田明美・水原道子・見館好隆[1号館 5階 会議室]

- 13:25-13:50 ●2009年度 助成研究報告
「経営環境の変化に伴う仕事・能力の変化とビジネス実務」
研究代表者 坂本一登(九州・沖縄ブロック研究会)[1号館 5階 会議室]

- 13:50-14:00 発表会場への移動・休憩

●研究発表[1号館 2階]

Table with 4 columns: A会場:1201教室, B会場:1202教室, C会場:1203教室, D会場:ビジネス総合演習室. Rows include sessions like A-1/企業が求める力の醸成を企図した授業の考察, B-1/オーストラリアにおける医療秘書の実態調査, etc.

15:10-15:30 コーヒーブレイク

Table with 4 columns: A会場:1201教室, B会場:1202教室, C会場:1203教室, D会場:ビジネス総合演習室. Rows include sessions like A-3/[高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究]に携わって(事例報告), B-3/高品質な初年次教育の鍵は「1回で正確に快く伝える就職脳(ビジネス実務教育)」, etc.

Table with 4 columns: A会場:1201教室, B会場:1202教室, C会場:1203教室, D会場:ビジネス総合演習室. Rows include sessions like A-4/本学の金融機関への就職希望学生における簿記検定等の資格取得について, B-4/実務を意識した情報教育の実践, etc.

- 16:40-17:00 懇親会場(IVYホール)への移動

- 17:00-19:00 ●懇親会[IVYホール(学生食堂)]

※研究発表テーマは、メインタイトルのみ記載



(学生スタッフ)

第2日 5月30日

開始・終了 セッション[会場]

- 08:30-09:00 受付[1号館 1階]
※5階会場に9:10までに入りたい方は、「第7回 プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞」大会の審査にご参加いただけます。

- 09:10-10:20 ●「第7回 プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞」大会
[1号館 5階 会議室]

- 09:10-09:20 審査員紹介・審査概要説明ほか ※発表順はくじ引きで決定

- 09:20-09:30 学生への非正規カリキュラムにおける教育法とその効果
～NPO法人DNA、ジョブカフェぐんまの事例を通して～
渡邊 大輔(株式会社クオリティ・オブ・ライフ)

- 09:30-09:40 デザイン脳で活性化化するビジネス実務教育
町田 由徳(岡崎女子短期大学)

- 09:40-09:50 社会との接点に留意した教育の事例報告
～学生による社会の課題発見・課題解決の提示～
粟屋 仁美(比治山大学短期大学部)

- 09:50-10:00 産学連携によるOJT実践事例とその効果
内田 恵里子(西日本工業大学)

- 10:00-10:20 就職面接シミュレーション学習法I 「学生プレゼンテーションはトップアスリートを続発させる」
小林 正彦(I・N・P就職能力開発センター)

- 10:20-10:40 事務連絡・発表会場への移動

●ブロック研究会 初年次教育事例報告[1号館 2階]

Table with 3 columns: A会場:1201教室, B会場:1202教室, C会場:1203教室. Rows include sessions like A-5/北海道ブロック 高校キャリア教育と大学初年次教育の接続, B-5/関東・東北ブロック 「ビジネス実務総論・演習」における初年次教育での「やる気」喚起への試み, etc.

- 11:50-12:00 表彰会場(1号館 5階 会議室)への移動

- 12:00-12:15 ●「第7回 プレゼンター・オブ・ザ・イヤー賞」表彰
[1号館 5階 会議室]

- 12:15-12:30 ●閉会の辞[1号館 5階 会議室]

■共同研究の発表者一覧

- \*1 中村真典(元・日本航空)・矢崎紀元(YKK経済教育研究所)
\*2 粟屋仁美(比治山大学短期大学部)
\*3 大宮智江(川口短期大学)
\*4 山田千夏(有限会社アリスト)・本間靖章(株式会社感響社)
\*5 大宮 登(高崎経済大学)
\*6 川口直子(愛知学泉短期大学)・水口美知子(名古屋経済大学短期大学部)・河野 篤(中部学院大学)・平田祐子(高田短期大学)



(会場風景)

「学生を惹きつける技術」



株式会社アクティブラーニング 代表取締役社長 羽根 拓也氏

(羽根 拓也氏 略歴)

同志社大学卒業。塾や予備校、語学学校などで人気講師として活躍する。90年、文化国際交流センターの試験に合格し、91年、アメリカペンシルバニア州のサスケハナ大学に日本語客員講師として派遣される。その後、ペンシルバニア大学、ハーバード大学等で講師をしながらアクティブラーニングの手法を研究。94年、ハーバード大学より「優秀指導証書」(Certificate of Distinction in Teaching)を受賞。97年、株式会社アクティブラーニングを設立。企業や官公庁などから依頼を受け、研修や人事コンサルティングなどを手がける。著書に『限界を突破する「学ぶ技術」』などがある。(株式会社アクティブラーニング ホームページ http://www.als.co.jp/)

ビジネス実務の概念理解や、その実情を調査研究することなどと同様に、そのビジネス実務を「いかに教育するか」は、当学会の大きな関心テーマである。今回の基調講演は、こうした学会員のニーズに応える、刺激的で、示唆に富む内容であった。

羽根氏は豊富な事例やアナロジーを用いてアクティブラーニングの重要性を説く。伸びる人と伸びない人の差は何か? その鍵はやはり「能動性」にあるという。マンガを描き、色づけをしてオリジナルな単語帳を作った生徒は、勉強を「自分ごと化」して、楽しんでいる。それが伸びにつながるのだ。「ドライバー効果」という説明も非常にわかりやすかった。たしかに運転手は助手席に座っている人よりも道を覚えやすい。脳は自身が「主体者」だと感じているときに活性化しやすいのである。教育者には学生の脳をドライバー状態にすることが求められているのだ。

徹底したチームティーチングの事例紹介も刺激的であった。ここでいうチームティーチングは単純に複数教員が連携して授業をするという意味ではなく、お互いのノウハウを共有し、問題点を指摘し合い、新しいプログラムや手法を共同開発する取り組みのことである。羽根氏が教員をしていたハーバード大学では、授業を参観し合うことが義務化されていたそうである。参観後は常にディスカッションを行われる。見る方も見られる方も意見交換を通じて様々な気づき

があるという。翻って、日本の高等教育もFDの重要性が認識されるようになったが、マイクロレベルで徹底的に授業改善を話し合うレベルには、まだ達していないのではないだろうか。

講演時間の1時間はあっという間に過ぎた。クリアで聞きやすい話し方、抽象論と具体論のバランス、ボディランゲージや対人距離についての配慮、見やすいスライド、まさに演題の「学生を惹きつける技術」を実践し、見本を示しているかのようなようであった。個人的経験から、特に「隣の人と話し合ってみて」というような簡易なワークは、逆に学生があまり「のらない」という実感がある。羽根氏の指示は、まるで魔法のように聴講者をのせ、アクティブな雰囲気を作り出していた。もって生まれた才能もあるのだから、努力の力で少しでも近づきたい。そんなロールモデルを見せてもらった講演であった。

(文責:大島 武)

